論　説

社会科学における家族分析

上　瀧　真　生

はじめに

今日，家族は，もっとも社会的に関心の高いテーマの一つである。そしてこの関心の高さを反映して，多様な科学がこのテーマにとりくんでいる。

こうした社会的関心の基礎には，まず何よりも現実の家族をめぐる危機的状況がある。危機的というのは，今までのやり方ではこれ以上やっていけないところに来ていて，なんらかの変化が求められている，という意味である。核家族が，旧来の地縁的・血縁的関係から切り離されて，その不安定性を増している。女性の賃金労働者としての社会とのかかわりが強まり，それが家族形成の中軸である男女の役割や子どもの養育のあり方の徹底的な見直しを要求している。長寿化と出生率低下による人口構成の高齢化は，高齢者と家族とのかかわりだけでなく，改めて人間そのものの生産を担う家族についての関心を高めている。

さらに，これらの状況を基礎とした社会的な運動やそれに対応する国家の政策が，家族についての社会的関心を高めている。1960年代からのマイノリティ運動としてのフェミニズム運動は，家族と社会のなかでの男女の役割の見直しを迫っている。他方，1970年代後半以来，新自由主義的なイデオロギーが国家の政策を支える一つの主要な潮流となったが，その家族観は，人間の再生産にかかわる諸問題を家族内で私的に処理することと，それを女性が主要にになうこととを要求している。

こうした家族をめぐる危機的状況とそこで生まれている諸問題，そしてそれへの対応をめぐってのイデオロギー的な対立の状況，そこから生まれる家族に

高知論叢（社会科学）第45号　1992年11月

ついての社会的関心が，多様な科学の分野での家族についての研究を進展させている。歴史学，心理学，文化人類学，社会学，などなど，今日，家族についての研究成果の蓄積には，目をみはるものがある。

マルクスとエンゲルスによって創始された社会科学には，これらの成果をふまえてその家族論を創造的に発展させるという課題がある。というのは，基本的には，この社会科学が，現実の諸問題の解決に貢献することをめざす実践的な科学であることを自らに課しているからである。しかし，それだけではない。家族研究のなかに，マルクスやエンゲルスの家族論について，その一面的な理解からその意義を低く見る，ないしは否定する潮流があるという問題がある。それだけに，マルクス，エンゲルスの方法を引き継ぐ社会科学が，課せられている課題に真剣にとりくむ必要がある。

一つの例として高橋正立の議論をみてみよう。彼はマルクスの家族論について次のように言う。

「一面で古典派の伝統を受け継ぐマルクスは，まず賃金を労働力の再生産費によって規定されるものとした。このマルクスによれば，これはつまり，労働者家庭を維持するための生活費に他ならない。古典派以来の「生活費賃金」的な考え方は，マルクスのこの理論において，家庭の内実にもっとも肉迫したかのように見える。…労働力の再生産ということが，労働者の日びの労働力の再生産にとどまらず，子供を生み育てるという形での労働力の担手そのものの再生産を含むことを考えれば，労働力の再生産の場としてつかまれるべき家庭は，複数の人間の単なる集合体ではありえず，それ特有の構造と機能とをもったものとして理解されていたことが，うかがえるのである。／ところが，実は，マルクスもまた，労働力の再生産費を労働力の再生産に必要な生活手段の価値と直接に等置することによって，折角開きかけていた扉をふたたび閉ざし，この点では近代経済学と同列に立つことになってしまった。…労働力の生産の過程そのものは，マルクスにとって経済理論上の主要関心事ではないし，また労働力再生産の場としての家庭も，独自の考察領域を構成することもなかった。」[1]

この議論がいかに乱暴であるかは，マルクスが『資本論』で何を課題としていたか，労働力価値の規定がその課題との関連でどのような論理次元でなされているかを考えてみれば，すぐわかる。『資本論』でのマルクスの課題は，資本一般を分析することであった。高橋が問題にしている労働力の価値規定の箇所は，『資本論』のなかでももっとも基礎的な剰余価値生産の法則を分析する

のに必要なかぎりでのみ家族を問題にしている。だから，マルクスは彼が眼前にしている資本主義社会における労働者階級の一般的な家族形態を所与の前提として取り扱っているのである。ここでマルクスが家族の内部構造に立ち入って分析していないのは，当面の分析課題にとって不必要な攪乱条件を持ち込まないためであり，家族が彼の理論的関心事でなく，独自の考察領域を構成しないからではない。実際にマルクスやエンゲルスは，当初から家族の問題が社会にとって一つの本質的な問題であることを提起し，その分析をさまざまな箇所でおこなっている[(2)]。高橋のような一面的な理解でマルクスの家族論を不十分なものとして葬り去ってしまうのでは，こうしたマルクスやエンゲルスの家族分析を現代に生かすことはできない。

以上のような社会・理論状況を念頭におくと，マルクスとエンゲルスの方法を引き継ぐ社会科学には，次のような二つの課題が課せられている。第一に，マルクスとエンゲルスが，彼らの生涯の理論活動のなかで，家族についてどのような分析をおこなっているのかを改めて明らかにすることである。これは，マルクスやエンゲルスの家族論についての一面的な理解によって，その家族分析の意義が歪められているときだけに，なおさら必要である。第二は，第一の課題は現代の発展しつつある家族研究の成果とつきあわせて，彼らの家族分析がもつ発展させるべき内容を明らかにするという方向で果たされなければならないし，さらに実際にそれを基礎に今日の段階での家族分析を発展させなければならないということである。マルクスやエンゲルスにも多くの歴史的限界があることもまた事実なのだから，単なる解釈学では，今日の家族についての現実的関心にも科学的関心にも応えることはできない。とくに様々な分野での家族研究が著しく発展しつつある状況では，なおさらそうである。

本稿は，このような問題意識をもってマルクスとエンゲルスの家族分析を再検討するが，先の二つの課題を全面的に一挙になしとげることは著者の現在の力量では不可能である。そこで本稿では，以下の二点に問題を限定して検討することとする。すなわち，第一にマルクスとエンゲルスにとっての家族分析の位置づけを明らかにすること，第二に家族の本質的な諸側面を概括することの二点である。

[注]

(1)　高橋正立『生活世界の再生産』ミネルヴァ書房，1988年，293～294ページ。

(2)　『マルクス＝エンゲルス全集』の事項索引の「家族」の項（大月書店，別巻4，113～114ページ）をみれば，彼らが，その初期から晩年に至るまで，家族と婚姻についての考察をくりかえしおこなっていることがわかる。

Ⅰ　唯物論的な歴史観と家族

1　歴史を規定する要因としての家族

エンゲルスは，『家族，私有財産および国家の起源』（以下，『起源』という）の初版序文（1884年）で，次のように述べている。

「唯物論的な見解によれば，歴史を究極において規定する要因は，直接の生命の生産と再生産である。しかし，これは，それ自体さらに二種類のものからなっている。一方では，生活資料の生産，すなわち衣食住の諸対象とそれに必要な道具との生産，他方では，人間そのものの生産，すなわち種の繁殖がそれである。ある特定の国の人間がそのもとで生活をいとなむ社会的諸制度は，二種類の生産によって，すなわち，一方では労働の，他方では家族の発展段階によって，制約される。」(1)

ここで，彼は唯物論的な歴史観における家族の位置づけを明らかにしている。家族とは，まず第一に人間そのものの生産＝種の繁殖の関係である。そしてこの関係が，物的な生産＝労働の関係とともに，「歴史の究極的な規定要因」である「直接の生命の生産と再生産」を構成し，社会的諸制度を制約する。

こうした家族の位置づけは，『起源』にはじまったものではない。マルクスとエンゲルスがその唯物論的な歴史観を確立しつつあった時期から，歴史を規定する本質的な関係として家族を把握している。すでに彼らのはじめての共同作業の成果である『ドイツ・イデオロギー』（1845～46年）において，歴史の四つの側面の一つとして家族が位置づけられている。彼らがそこであげている四つの側面とは，次のことである。第一に，人間は生きるために衣食住などの必要を満たすことが必要であり，したがってすべての歴史の根本条件は欲求を満たす諸手段の産出，物質的な生活そのものの生産であること。第二に，満たすべき欲求そのものが歴史的に生産されること。第三に，人間は他の人間たち

をつくり，繁殖するということ。この関係が家族である。第四に，これらの生産は自然的関係であるとともに社会的関係であり，その社会的関係は生産力の発展，経済的発展によって基礎づけられていることである[2]。

このように，マルクスとエンゲルスにとって家族は，歴史を規定する本質的な要因としてつねにその理論的関心の対象であった。エンゲルスは，『起源』はマルクスの遺言の執行であるといっている[3]。その一つの内容は，マルクスが残したモーガンの『古代社会』についての研究をふまえながら，彼らの長年の関心事であった家族の本質とその歴史を，当時の最新の知見をもとに明らかにすることにあったといえよう。前述の高橋のマルクス批判との関連でいえば，『資本論』における労働力価値の最初の規定では家族は歴史的な前提として受けとられていたのであるが，『起源』ではそれが独自な分析の課題とされているということである。マルクスとエンゲルスの家族論を検討する場合，このような彼らの問題意識とそれにもとづく仕事とを全体として検討するのでなければ，その意義と限界を明らかにすることはできないであろう。

2　物質的生産の社会関係と家族

『起源』初版序文でエンゲルスが「社会的諸制度は，二種類の生産によって，すなわち，一方では労働の，他方では家族の発展段階によって，制約される」と述べていることについては，これが二元論かどうかをめぐる論争がおこなわれてきた[4]。エンゲルスはここで，マルクスが唯物論的な歴史観の一般的な結論として定式化した，社会の実在的土台としての生産諸関係[5]以外に，家族を社会の土台としているのではないかという疑問をめぐっての論争である。しかし，この疑問は序文の続きをよく読んでみれば氷解する。

「労働がまだ未発達であればあるほど，労働の生産物の量が乏しければ乏しいほど，社会制度はますます圧倒的に血縁の紐帯に支配されるものとして現われる。しかし，このような血縁の紐帯にもとづく社会の編成のもとで，労働の生産性はますます発展し，それにつれて私的所有と交換，富の差異，他人の労働力を利用する可能性が，それとともにまた階級対立の基礎が発展する。‥‥血縁団体に立脚する古い社会は，新たに発展してきた社会諸階級の衝突のなかで打ち砕かれる。それに代わって，国家に

総括された新しい社会が現われるが，この国家の下部団体は，もはや血縁団体ではなくて，地縁団体である。この社会では，家族の制度はまったく所有の制度によって支配され，これまでの文書にしるされた歴史全体の内容をなしているあの階級対立と階級闘争とが，いまや自由に展開される。」（傍点は原文，以下おなじ）[6]

ここで家族は，「血縁の紐帯」に等しいものとされ，この概念によって置き換えられている。そのうえで，労働の未発達な段階，すなわち原始的な社会では，この血縁紐帯が社会を編成する唯一の原理であるというのである。それは，種の繁殖，すなわち人間そのものの生産の社会関係であるだけでなく，物質的な生産の社会関係である原始的な共同体的な所有の担い手である。また同時にそれは，社会を意識的に編成するさいの基礎となる社会関係であり，意識を通過するという意味でイデオロギー的社会関係でもある。つまり，すべての社会関係が，人間そのものの生産の社会関係を基礎とする血縁の紐帯に重なりあっているというのである。そして労働が発展するにつれて，血縁紐帯の外に，あらたな社会関係として，階級的な生産関係と商品交換の関係（生産関係），および社会を編成する地縁紐帯と国家（イデオロギー的社会関係）とが生みだされ，これらによって家族が支配されるというのである。

では，このような社会関係の発展を規定しているもの，原始的な社会において血縁紐帯を唯一の社会関係とし，その後の社会でそれを従属的な社会関係とするものはなにかといえば，それは「労働」である。「労働がまだ未発達であればあるほど」，血縁紐帯が支配的なのである。その血縁紐帯の支配する社会のもとで「労働の生産性はますます発展」するから，私的所有と交換，そして階級的生産関係が生みだされ，地縁集団と国家が生みだされるのである。このように，エンゲルスは，物質的生産とその社会関係こそが社会の実在的土台であるという見地を貫いており，どこにも二元論はない。

これらのことは，『起源』にいたるマルクスとエンゲルスの研究の進展をふまえて，『ドイツ・イデオロギー』における歴史の四つの側面の分析と対照してみれば，よりよく理解される。

「労働における自己のそれであれ，生殖における他人のそれであれ，生活の生産は，かならずただちに二重の関係として ―― 一面では自然的関係として，他面では社会的関係として ―― あらわれるものである。ここで社会的というのは，どんな条件の

もとであろうと，どんなやり方においてであろうと，またどんな目的のためであろうと，ともかく何人かの諸個人の協働が考えられているという意味である。次のようなことが生ずるのはここからである。すなわち，特定の生産様式あるいは特定の工業段階は，いつでも特定の協働様式あるいは特定の社会段階と結びついており，この協働様式が，それ自体ひとつの《生産力》であること。人間たちが入手しうる生産力の総体が社会状態を規定すること。それゆえ，《人類の歴史》はいつでも，産業および交換の歴史とつなげて研究され，仕上げられなければならないということ。」(7)

ここでは，人間そのものの生産が，自然的な関係と社会関係との統一であることが第一に指摘されている（物質的生産もこれら二つの統一なのであるが）。第二に，その社会関係としての側面は物質的な生産によって基礎づけられていることが明確にされている。つまり人間そのものの生産の社会関係としての家族は，まずなによりも物質的な生産によって規定されているのである。

「この，最初のうち，唯一の社会的関係であった家族は，やがて増大した諸要求があたらしい社会的諸関係をうみだし，増加した人口があたらしい諸要求をうみだすようになると，ひとつの従属的な社会的関係になる」(8)。

ここでいう「社会的関係」としての「家族」が，『起源』では「血縁の紐帯」と言い換えられている。この言い換えは，マルクスとエンゲルスがモーガンによる氏族の発見に出会ったことから生じている。人間そのものの生産の社会関係を基礎とする血縁の紐帯は，原始的な社会においては，今日私たちが知るような一夫一婦婚を基礎とする家族と親族の社会関係ではなく，氏族であった。この氏族という血縁の紐帯が，人間の最初の社会関係であり，唯一の社会関係なのである。

『起源』は，この人間そのものの生産の社会関係が唯一の社会関係であるのは，物質的生産が未発展だからだということを明確にしている。「氏族制度は，きわめて未発達な生産を，したがって，広大な領域におけるきわめて稀薄な人口を前提する」のである(9)。

人間ははじめは，人間そのものの生産の社会関係しかもたないのだから，それは同時に物質的な生産の社会関係の担い手でもある。すなわち，人間そのものの生産の社会関係である氏族が，そのまま物質的生産の社会関係である原始的な共同体所有の担い手なのである。

これが生産の発展によって，「ひとつの従属的な社会的関係になる」。『起源』は，このことを研究の進展にもとづいて敷衍し，私的所有と商品交換および階級的生産関係という新しい物質的生産の社会関係が発達し，それらが支配的な物質的生産の社会関係になると述べているのである。物質的生産とその社会関係の発展にともなって，人間そのものの生産の社会関係が氏族とそのもとでの男女平等で比較的ゆるやかな対偶関係から男の支配にもとづく排他的な婚姻関係を基礎とする家族へと変化する。それまでの物質的生産の支配的な社会関係である原始的な共同体所有の担い手であった氏族は解体される。私的所有という新しい支配的な生産の社会関係のもとで，程度の差はあれ共同体から独立した家族という新しい人間そのものの生産の社会関係がうまれ，その家族が支配的な私的所有の関係のもとで従属的な社会関係として物質的生産における一定の役割を担う。階級社会であるから，階級によってその家族が物質的生産において担う役割も異なってくる。すなわち，物質的な生産とその社会関係の変化が，人間そのものの生産の社会関係そのものを変化させるとともに，その物質的生産の社会関係における位置を変化させるのである。

ところで，生産の社会関係だけが，社会関係ではない。社会関係には，意識を媒介するイデオロギー的社会関係もある。

「いまようやく，というのは，すでに根源的な歴史的関係の四つの契機，四つの側面の考察をへたので，われわれは，人間が《意識》をももつ，ということをみいだすのである。…意識はそれゆえ，そもそもの始まりから，すでに社会的産物であり，およそ人間があるかぎり，それはかわらない。意識は，もちろんまずはじめは，もっとも身近な感性的環境についての意識であり，自己を意識しはじめている個人の外にある他の人々や事物との，せまい結びつきの意識にすぎない。」(10)

「まわりの諸個人と交渉せざるをえない必然性に気づいたことが，人間は一般に社会のうちで生きている，ということへの自覚の端緒なのである。この端緒は，この段階の社会生活とおなじく動物的である。それはたんなる群棲意識にすぎない。人間が，ここで闌羊(えん)と区別されるところは，かれの場合は，かれの意識が，本能のかわりをしている点，あるいはかれの本能が，ある自覚されたものである，という点にすぎない。このような闌羊意識，あるいは部族意識は，生産性の上昇，諸要求の増加，および両者の基礎にある，人口の増加によってますます発展し，つくられてゆく」(11)。

ここでいう「自己を意識しはじめている個人の外にある他の人々…との，

せまい結びつきの意識」が，氏族という「血縁の紐帯」の意識なのである。すでにこの血縁意識は「本能のかわりをして」おり，氏族は，「本能が，自覚された」うえでの意識的な社会関係なのである。人間そのものの生産の社会関係を，この血縁意識の面からみれば，イデオロギー的社会関係ということになる。このイデオロギー的社会関係は，物質的生産とその社会関係に規定された人間そのものの生産の社会関係から生みだされる社会的産物なのであり，その意味でイデオロギー的社会関係としての家族も，究極においては物質的生産とその社会関係によって規定されているのである。

ところで，原始的な社会においては，人間そのものの生産の社会関係が唯一の社会関係なのだから，それは同時に，社会を意識的に編成するイデオロギー的社会関係でもある。そしてこのイデオロギー的社会関係の側面，すなわちはじめは血縁紐帯の意識として現われる社会関係についての意識が，物質的生産の発展にともなって発展するというのである。その発展は，『起源』によれば，血縁紐帯を超えた地縁紐帯と国家の形成である。これは，血縁の紐帯以外の意識的な社会関係を生みだすことであり，その新しいイデオロギー的社会関係のもとに家族を組み込むことである。このイデオロギー的社会関係の発展を生みだすのも，物質的生産とその社会関係の発展なのである。

以上から，エンゲルスが家族の分析においても一貫して物質的生産とその社会関係が社会の基礎であるという見地を貫いていることが明らかとなった。同時に，もう一つ別のことも明らかになっている。それは，家族が究極においては物質的生産とその社会関係に規定されるが，それだけには還元されない異なる諸側面をもつ社会関係であるということである。この家族のもつ諸側面を分析することが，家族の科学的な理解にとって必要不可欠のことなのである。

[注]

(1)　『マルクス＝エンゲルス全集』大月書店（以下，『全集』という），第21巻，27ページ。

(2)　花崎皋平訳『新版 ドイツ・イデオロギー』合同出版，1966年（以下，『新版』という），54～64ページ，『全集』第3巻，23～28ページ。

(3)　『全集』第21巻，27ページ。

（4）　この論争については，江守五夫『家族の起源』九州大学出版会，1985年，が詳しい。また，近年の日本史研究における家族への関心にともなって，明石一紀「エンゲルスの家族概念」『歴史評論』第438号，1986年，関口裕子「対偶婚概念についての理論的検討」前近代女性史研究会編『家族と女性の歴史　古代・中世』吉川弘文館，1989年，などがこの論争にふれている。

この問題については，すでに別稿（上瀧「家族のイデオロギー」『高知論叢』第37号，1990年）で私の基本的な見地を明らかにしているが，本稿では，『起源』と『ドイツ・イデオロギー』との対照によって，その見地をより明確にした。家族のあり方も，社会の物質的生産諸力に対応する生産諸関係によって究極的に規定されるというのがエンゲルスの一貫した見地である，という点で，私は基本的に関口氏と同一の見地に立っている。

しかし，家族そのものの所有へのかかわり方が，直接に家族のあり方を規定するものではない。物質的な生産の社会関係の面からみれば，究極的には支配的な社会関係が血縁の紐帯のあり方とそれが物質的生産の関係においてはたす機能を規定する。しかし逆に，たとえ従属的なものとなったとしても，この血縁紐帯という社会関係が物質的な生産における支配的な社会関係に作用を及ぼすというのも事実である。家族の具体的あり方を明らかにするには，これらの相互作用の分析が必要である。また，家族は，自然的な関係と社会関係との統一であり，自然的な関係の作用も無視することはできない。とくに人間自体の生成期においては自然的関係（エンゲルスが集団婚から対偶婚への発展の一つの原動力としている近親婚の排除など）が社会関係とともに本質的な役割を果たす。さらに，物質的生産の社会関係が究極において家族のあり方を規定するというばあいも，イデオロギー的社会関係を媒介にしていることを忘れてはならない。

（5）『経済学批判』序言，『全集』第13巻，6～7ページ。

（6）『全集』第21巻，27～28ページ。

（7）『新版』58ページ，『全集』第3巻，25～26ページ。

（8）『新版』55ページ，『全集』第3巻，24～25ページ。

（9）『全集』第21巻，100ページ。

(10)『新版』59～60ページ，『全集』第3巻，26ページ。

(11)『新版』61ページ，『全集』第3巻，27ページ。

Ⅱ　人間そのものの生産のイデオロギー的社会関係

これまでの考察から，マルクスとエンゲルスは家族を三つの異なる側面から把握していることがわかった。第一は，それが自然的な関係，すなわち人間がもつ自然，すなわち生得的な衝動と能力を基礎とした，また，それに働きかけ

る関係であるという側面である。第二は，それが，主要なものであるか従属的であるかのちがいはあるが，それ自体，物質的な生産の社会関係を担っているという側面である。第三は，それがイデオロギーを媒介にして成立しており，また，それらのイデオロギーを生産し，再生産するイデオロギー的社会関係であるという側面である。

私は，かつて家族をイデオロギー的社会関係であると規定した。これは，家族が物質的な生産の支配的な社会関係によって究極においては規定されており，しかもかならず意識を媒介する社会関係であるという二重の意味での規定であった。私はここで，この規定をより正確に発展させて，家族は人間そのものの生産のイデオロギー的社会関係であると規定し直す[1]。

家族がイデオロギー的社会関係であるということは，家族あるいは血縁の紐帯が種の繁殖の自然的関係を含むことを排除しない。しかし家族のもつ自然的基礎は，ときに物質的生産の社会関係と衝突し，社会関係にみあうように制限されなければならない。この自然的基礎をコントロールする社会関係が家族である。そしてこの制御は，意識的な人間の社会においては，かならず意識を媒介にしてイデオロギー的におこなわれるのである。

また，家族がイデオロギー的社会関係であるということは，それが物質的生産の社会関係の担い手であることを排除しない。家族は，一面で物質的な生産の社会関係の担い手であり，そのあり方は支配的な生産の社会関係によって規定される。この物質的な生産の社会関係としての家族も，かならず意識を媒介にしてイデオロギー的に成り立っている。

家族がイデオロギー的社会関係であるということは，このような関係を含めて具体的に分析されなければならない。家族が人間そのものの生産のイデオロギー的社会関係であるというのは，これらのことを端的に表わした規定である。私たちは，家族が物質的な生産の社会関係によって究極的には規定されていることをふまえながら，それがもつ自然的関係，物質的生産の社会関係の担い手，イデオロギー的社会関係という三つの側面とそれらの相互作用とを分析することをつうじて，家族をより豊かに具体的に明らかにすることができる。

[注]

（1）　上瀧「家族のイデオロギー」参照。なお私の家族研究は，鈴木茂の人間の本性についての研究と上野俊樹のイデオロギーについての研究から多くを学んでいる。鈴木茂［鈴木茂論文集刊行会編］『鈴木茂論文集1　理性と人間』文理閣，1989年，および上野俊樹『アルチュセールとプーランツァス』新日本出版社，1991年，参照。

Ⅲ　自然的関係としての家族

マルクスとエンゲルスは，家族が自然的な関係と社会関係とからなっているという。このばあいの自然的関係というのは，人間の自然，その生得的な能力ないし本能がそのまま無制限にその姿を現わすということをいっているわけではない。それは必ず社会関係（物質的生産の社会関係とそれを基礎としたイデオロギー的社会関係）と統一されているのであり，それは社会関係によって制限されている。しかし，人間とその社会関係はなにもかも社会的な産物なのではない。社会関係によって制限されるとはいえ，やはり自然的な基礎は存在するのであり，社会関係がなすことは自分にみあうようにこの基礎を助長したり，抑制したりすることである。この見地からすれば，家族の分析によくみられるすべてを生得的な能力に還元してしまう生物学主義も，逆にすべてを社会関係に還元してしまう社会学主義もともに誤りである。問題は，社会関係が規定的であることを前提にして，両者の相互作用を分析することである。

マルクスやエンゲルスが一貫して述べているように，家族はまずなによりも，種の繁殖，すなわち人間そのものの生産の社会関係である。だから，家族がその基礎としてもつ自然的なもの，人間の生得的な能力とは，まずなによりもこの種の繁殖にかかわる能力である。それは二つの別の能力から成り立っている。すなわち，第一に男女のあいだでの生殖行為にかかわる性本能であり，第二に子育てにかかわる生得的能力である。

さらに，なぜこうした人間そのものの生産が必要かといえば，それは個体としての人間が老い，やがて死ぬからである。したがって老いと死は，家族がその基礎にもつ第三の自然的なものである。

1　性と人間家族の形成

性本能は，これなしには生殖行為がおこなわれず，種の繁殖はおこなわれえないのだから，家族成立の基礎となる生得的な能力である。しかし，人間が社会関係を必要とするという面からみると，この本能の無制限の発現には以下のような問題がある。

第一に，近親相姦の問題である。近親相姦は，障害をもつ子の発生率を高め，その種の存続に悪影響を及ぼす。ところが人間は，恒常的な社会関係を必要とする。恒常的な社会関係の存在のもとでの性本能の無制限の発現は，近親相姦の危険を増大させる。

現存する群れを形成する動物，とくにサルにおいては近親相姦を回避するなんらかの機構が存在することが知られている。まして人間は共同によってのみ生存できる動物であり，どんな動物よりも社会的な動物である。だから，その生成の道筋のなかで近親相姦を回避する機構を身につけることなしには種として存続することができなかった。また人間は，意識的な動物である。だから，その近親相姦回避の機構をたんに生得的な傾向としてだけでなく，意識的な婚姻の規制と近親婚タブーとしてもつことが必要であった[(1)]。

こうした近親婚を排除するための性本能の意識的な抑制の原型が，双分型の母系氏族組織とそのもとでのゆるやかな男女の対偶関係であった。双分型の母系氏族組織とは，一氏族が二つの分族からなり，婚姻は氏族内で，そして分族間でおこなわれなければならず，生まれた子は母方の分族に所属するという婚姻組織である。今日の知見からみれば，『起源』が，対偶婚までの家族の歴史は近親相姦を排除する自然淘汰の歴史であるというのは，種としての人間生成の過程についてのことなのである。それは，双分型母系氏族組織を生み出すことによって終わる[(2)]。

第二に，性本能は排他的であるという問題である。性行動は，雄と雌との社会関係をとりむすぶものであり，この面からみれば社会関係を媒介し強める。だから固定的な性関係は，その当事者間の関係は密接にする。しかし，他方で固定的な性関係はその当事者以外の他者を排除する。とくに雄の性本能は，多

くのサルにみられるように，複数の雌の囲い込みと他の雄の排除，雌の独占すなわちハーレムの形成として発現する。ハーレムの形成は，群れのなかに複数の成熟した雄が存在することを許さない。そして雌をめぐる雄どうしの闘争をひきおこす。

ところが人間は，成年の男の共同労働にもとづく社会を必要とする動物である。人間がその生産を発展させ，社会を発展させるためには，雌を独占しようとする雄の性本能を抑制する必要があった。性本能が，社会的な生産を脅かす。『起源』が，「雄の嫉妬は，家族の紐帯であると同時に隔壁でもあり」，「動物の家族と人間の原始社会とがあいいれないもの」だ[3]と述べているのは，こういうことである。

群れにとって危険な雄の性本能を抑制する一つの方向は，ピグミー・チンパンジーのように，雄の嫉妬を抑制してまったく無規律な性行動を容認し，さらに積極的に性行動を群れの団結を強める道具とすることである。それによって群れの団結を高めることは可能になる。しかし，それでは意識的な生産を発展させることはできない。性行動を団結を強める道具とするには，性行動に多大なエネルギーを費やすことが必要である。ところが，生産を発展させるためには，意識的な計画の策定とそれにもとづく肉体の意識的統制（すなわち人間的な労働）を発展させることが必要であり，これにも多大なエネルギーが必要である。したがって，性行動を媒介にした社会関係の維持・発展と意識的な生産の発展とは相反する関係にある。ピグミー・チンパンジーに道具使用の例が少ないのは，こうした背反関係の現われと考えることができる[4]。

人間は別の道を歩んだ。それは，生産がおこなわれる一定期間性行動を意識的・社会的に排除すること，性生産タブーの創出である。それは，生産の期間を定め，その期間から性行動を締め出すことによって，性本能の破壊的な作用から生産の社会関係を守ろうとする人間社会の意識的な作用である。性生産タブーは，表裏一体のものとして，短期間無規律な性行動を放任するオルギー祭をともなっている[5]。『起源』はオルギー祭（『起源』ではサトゥルナリア祭）を集団婚ないしは無規律な性行動のなごりとみている[6]が，それは，今日の知見からいえば，このような性本能の抑制の代償としての短期間の性本能の解

放という意味である。

さらに双分型母系氏族のもとでのゆるやかな男女の対偶関係も，近親相姦を排除する制度であるだけでなく，人間社会を破壊する無制限の性本能の発現を抑制する制度でもある。それは，個々の男の性本能を抑制してすべての男の性本能をみたし，そのことによって社会的な連帯を破壊する嫉妬と闘争を排除するのである。

これらの側面をみれば，家族は性本能を社会的にコントロールするための社会関係である。

2　子育てと家族形成

人間は，性本能にもとづいて生殖するだけでは，種を繁殖させることはできない。人間そのものの生産は，子を産むだけでは終わらないのである。

人間の赤ん坊は，自立して生活するいっさいの能力をもたずに生まれてくる[7]。哺乳の時期が終わり，自分で立ち上がり歩くことができるようになるまで約一年がかかる。この頃から言葉を話しはじめるが，それが社会成員としてコミュニケーションを可能にするまでに発達するには，さらに十年前後の年月がかかる。性的な成熟にもふつう十数年かかる。人間は社会をつくらなければ生きていけないから，どんな社会においても，生物的な成熟とは別に，社会の構成員となるための社会的成熟が必要である。さまざまな社会が，社会的な成熟を社会的に認める儀礼をもっている。この儀礼を研究したヘネップが引いている例によれば[8]，だいたい生後十数年たって子ども期とは区別される見習い期が始まり，数年から十数年に及ぶ見習い期ののちに成熟した社会の構成員として認められる。種の繁殖のために人間は，その間，子どもにたいするなんらかの世話，すなわち子育てを必要とするのである。

子育ての生得的な基礎というと，通常，女の母性が問題にされる。たしかに女だけが，生得的に妊娠し子を産むことができ，授乳できる。これらにかかわって，さらに広い心理的なものも含んだ生得的な能力が女に備わっているのは当然のことであろう。しかし，それは男の側に子育てにかかわる生得的基礎がな

いということを意味しない。

妊娠・出産・授乳の時期は約二年間，少なくともその間，女はその条件にみあった労働をおこなわなければならない。女だけが子育てにたずさわるのだとすれば，さらに十年前後，子どもの世話をしながらできる労働をしなければならない。それが女の人生のうちで何回かくりかえされ，時に授乳期以後の子育てと妊娠・出産・授乳の時期が重複する。そのうえ人間は，進化の過程で一般的に肉体的能力の性差をうけとっている。妊娠・出産・授乳・子育ておよび自身の肉体的能力の制限という条件のもとで，女の労働と子育てだけで女とその子どもの生活が保障できるかというと，そうではない。というよりも，そうした制限された女の労働と子育ての限界を男の労働と子育て（これも女と同様に制限されているのだが）によってのりこえ，補足し，その両者を結合して子どもを育てるところに，人間の種としての生活様式がある[9]。男女の分業は，同時に男女の協業である。性にもとづく自然発生的な分業は，こういう意味で人間の特徴なのである。

何が，こういう子育てにおける自然発生的な性的分業にもとづく協業を成り立たせるのか。性関係はたしかに男女の結びつきを強化するが，それは二次的である。アイベスフェルトは，人間の共同性の生得的な基礎についての研究において，性衝動をつうじて永続的な結びつきが作られるのは人間と二，三のサルだけであり，それは二次的で付随的に発達してきたものだとしている。そして結合の衝動は，第一になんらかの危険から逃走するさいにお互いに身をよせあおうとする接触の衝動であり，第二に育児の衝動であるという。子育ては，大人を子に結びつけ，それをつうじて大人のあいだのきずなを深める。性関係はこうした基礎のうえで働くものだというのである[10]。

双分型の母系氏族では，男は性関係をとおして女とその子のために働くのではない。男は自分の姉妹とその子のために働くのである。その結合の基礎は性関係ではない。一方では，同じ母のもとで共に育ったことにもとづく血縁の意識がその基礎となるであろう。他方では，子育ての意欲が男にも生得的に備わっていることがその基礎をなすと考えられる。したがって，子育てにかかわる生得的能力は，たんに女に備わっているだけではなくて，男にも備わっていると

考えざるをえない。

男の子育てにたいする生得的な要求は，私的所有の発生のもとで男が自分の子への財産継承を要求することの自然的基礎でもあろう。一定の生産力の発展のもとで男女の対偶関係が生産の単位となること，その基礎のうえで男女の対偶関係が明確化・安定化すること，生産の発展の一定の段階で男の労働が優位性を獲得すること，剰余生産物の発生などが，私的所有とその父系相続を生み出す社会関係である。しかし，男が自分の子に財産を残すことを要求する心理的基礎がなければ，これらの関係は現実的な力を発揮しないであろう。この面からも男の子育てにかかわる生得的衝動と能力を見直す必要がある[11]。

以上から明らかなように，男にも女と同じように子育てにかかわる生得的な基礎（父性）がある。もちろん女と男のもつ子育てにかかわる生得的な衝動や能力には，性差が存在する。しかし，それがすべてを決めるのではない。むしろ，物質的生産の発展のなかで，生得的な性差はその生産力にみあうように社会的にコントロールされ，男女の分業はつねに見直されてきたし，いまも見直されている。家族の歴史は，この面からみれば，男女の生得的基礎のうえでの子育ての社会関係の発展の歴史である。

3　老いと死と人間家族の形成

人間は，個体としてみれば，いつかは老い，そして死ぬ。この個体の老いと死が，新たな個体の生産，種の繁殖を要求するのである。これは生物一般に共通である。しかし人間の場合，それだけではない。

人間の場合，老いるということは，それだけ長い生活経験を有するということである。人間の意識性の発達は，さしあたりは経験的な知恵の増大として現われる。その知恵は，生産活動にかかわる知恵ばかりでなく，社会関係についての知恵でもある。この面からいえば，老いた人間は生産と社会関係についての経験的な知恵の蓄積を体現する。したがって，意識的・社会的な生産の維持・発展には，生産的な活動に直接に参加できなくなっても老いた人間が生活できる社会関係をつくることが必要である[12]。

しかし他面，そうした経験的な知恵の結晶化は，自由な意識的な活動の創造的な発展を阻害する要因にもなりうる。個体の老いが社会の老いにつながる危険があるのである。ましてその社会には独自の生産力の限界があり，そのもとで老いた個体を社会のなかに包摂するには一定の限界がある。この面からいえば，個体の死は，人間の社会の発展のなかに組み込まれている。そこで個体の死を社会も個体も受け入れることのできるイデオロギー（文化人類学によると，その普遍的にみられる一つのタイプは再生の観念だという[13]）と社会関係とが必要となる[14]。

個体の死は，さらにいくつかの現実的問題を提起する。第一に，個体のもつ経験的知恵を後の世代に伝承しなければならないという問題である。このことなしには，人間の意識的・社会的生産の発展はありえない。人間は，この知恵の伝承のための社会関係を発展させなければならない。

第二に，生産手段の伝承の問題である。生産手段は，経験的な知恵の物質化したものであり，それ自体が意識的な生産の産物である。消費のための資源に余剰が生じず，その個体がすべて消費してしまう場合でも，生産手段は後の世代に残されることがある。そして生産が発展すればするほど，後の世代に残される生産手段は増大する。この生産手段の世代的伝達なしには，人間の生産は発展しない。したがって，人間は生産手段の伝達のための社会関係，すなわち相続の社会関係を発展させなければならない。

第三に，死んだ個体が生きている個体の生存にとって脅威になるという問題である。生産力の許すかぎり，社会のなかで個体が老いを迎えることは，社会にとって有益なことである。老いた個体はやがて死ぬ。だから，個体は社会のなかで死を迎えることになる。社会のなかで死んだ個体（あるいは死を迎えつつある個体）をどのように扱うかということが問題となる。

死は病気と密接な関連がある。伝染性の病気であれば，個体の死にいたる過程がその属する社会に病気を蔓延させ，他の成員の死をもたらす。そうでない場合でも，死体自体が社会の衛生状態を悪化させ，生きている成員の生にとって脅威となる。定住化がすすめば，なおさらそうである。だから，人間は個体の死を迎え，その死に現実的に対応する，すなわち葬送に関する社会関係を発

展させなければならないのである[15]。

人間のはじめの唯一の社会関係は，血縁の紐帯であるのだから，これらの老いと死への対応はまず第一に血縁の社会関係によってなされなければならない。ところが自己保全の本能をもつ生物として，そして意識をもつ動物として，死は人間にとってもっとも忌避すべき現象である。そうした忌避すべき死に対応することによって，血縁の紐帯はその結びつきをより強化する。

以上の面からみれば，家族は老いと死に対応するための社会関係である。

［注］

（1）河合雅雄は，近親相姦回避の機構がサル類に普遍的にみられることをふまえて，それがタブーになることが人間社会と他のサル類の群れとを分けると考えている（河合雅雄『人間の由来』下巻，小学館，1992年，23ページ）。

（2）『全集』第21巻，58ページ。双分型母系氏族の形成までを人間生成史の問題として考える見地は，セミョーノフの研究から学んでいる。ユ・イ・セミョーノフ［中島寿雄，中村嘉男，井上紘一訳］『人間社会の形成』上・下巻，法政大学出版局，1970年・1971年，および同［新堀友行，金光不二夫訳］『人間社会の起源』築地書館，1991年，参照。

（3）『全集』第21巻，40ページ。

（4）河合『人間の由来』下巻，324～336ページ。

（5）セミョーノフ『人間社会の形成』下巻，50～71ページ，同『人間社会の起源』289～295ページ，参照。

（6）『全集』第21巻，55ページ。

（7）ポルトマンは，このことを人間の独自の特性として，人間は二次的に巣に就くものであると規定した（アドルフ・ポルトマン［高木正孝訳］『人間はどこまで動物か』岩波新書，1961年）。これにたいして河合雅雄は，こうした特性はサル類に一般的にみられ，人間のそれはサル類の特性を基礎に発展したものであるとしつつ，この無能力な子どもが人間の家族形成をうながしたとしている（河合『人間の由来』上巻，266～268ページ）。

（8）アルノルト・フォン・ヘネップ［綾部恒雄，綾部裕子訳］『通過儀礼』弘文堂，1977年，57～97ページ，参照。

（9）黒田末寿は，アウストラロピテクスの平均寿命に関する研究などに言及しつつ，男の育児活動への援助と男女の分業にもとづく協業とが，人間の出生率を向上させ，他の類人猿以上に人間を繁栄させることになったと指摘している（黒田末寿「サルからヒトへ」黒田末寿，片山一道，市川光雄『人類の起源と進化』有斐閣，1987年）。

(10) アイブル・アイベスフェルト［日高敏高，久保和彦訳］『愛と憎しみ』新装版，みすず書房，1986年，172～184ページ。

(11) 鍵谷明子は，今日残る最も純粋な母系制社会であるニューギニアのトロブリアンド島の父親も息子への父性愛が満たされないためにおおいに悩むと述べ，母系制崩壊の一つの要因が男の父性愛と母方おじとしての義務との相克であることを指摘している（鍵谷明子「母性の多義性」脇田晴子編『母性を問う』上巻，人文書院，1985年，28～29ページ）。

(12) 高橋恵子，波多野誼余夫『生涯発達の心理学』岩波新書，1990年，および上瀧真生「老年期と社会(1)」『高知論叢』第40号，1991年，参照。

(13) 山下晋司「通過儀礼――生と死」村武精一，佐々木宏幹編『文化人類学』有斐閣，1991年，参照。

(14) 上瀧真生「資本主義社会における老年者介護と家族」『高知論叢』第42号，1991年，参照。

(15) セミョーノフ『人間社会の形成』191～196ページ，および同『人間社会の起源』256～262ページ，参照。ここでセミョーノフは，ネアンデルタール人における死者の埋葬の起源を，集団の統一性の意識から生じる死者を集団内にとどめおこうとする傾向と死者が生きた集団構成員にもたらす病と死から生じる死者への恐怖との二つの傾向から説明している。

Ⅳ 物質的生産の社会関係を担う家族

家族は一面で物質的生産の社会関係を担っている。原始的な社会では，その共同体所有を担うのは，氏族という血縁の紐帯であった。人間そのものの生産の社会関係が，そのまま原始的な共同体所有の担い手になるのである。私的所有の発生とともに，家族が自立し，その内部では男の支配にもとづく家父長制が成立する[1]。そこでは家父長となる男が私的所有の担い手である。他の家族構成員は家父長によって支配され，家族は家父長の私的所有を再生産するための社会関係となる。私的所有の発生にともなって，階級の分化があらわれる。被支配階級の家族は，支配階級の私的所有にもとづく支配のもとにくみこまれる。つまり，階級社会においても，家族という人間そのものの生産の社会関係は，私的所有のもとでの従属的な社会関係として物質的生産を担うのである。

家族ないしは血縁の紐帯が物質的生産の社会関係を担うというとき，そのもっとも基礎にあるのは，それが物質的生産の人的要素，すなわち労働力を再生産

するということである。資本主義的生産様式においてのように，家族が物質的な生産の直接的な単位でない場合も，労働力の再生産の単位としては，物質的な生産の社会関係に組み込まれている。他方，家族が物質的な生産の社会関係を直接に担う場合もある。前資本主義的生産様式では，多かれ少なかれ，家族は直接的な生産の単位であった。

いずれにせよ，物質的な生産に組み込まれた社会関係としての家族には，次のような諸側面がある。第一に，家族が物質的な生産を担う基礎には，男女の自然発生的分業があるという側面である。第二は，階級に分化した社会においては，支配階級と被支配階級によって，物質的な生産へのかかわり方が異なっており，したがってそれぞれの家族の物質的な生産へのかかわり方が異なるという側面である。第三に，被支配階級の家族成員がどのように私的所有にもとづく支配－従属の関係に組み込まれるかという側面である。つまり，家族の成員ごとに個人として組み込まれるのか，家族が自立した単位として組み込まれるのか，あるいは家族が自立せずに共同体の構成要素として組み込まれるのか，という問題である。第四に，血縁の紐帯が，社会的分業に，したがって社会的な労働の配分とその生産物の分配においてどんな役割を果たすかという側面である。

1　男女の自然発生的分業とその変容

人間は，物質的な富を生産し，それを消費するが，その全過程において労働を必要とする。物質的な富は，最終的には消費されなければならない。そして人間は，労働によって物質的富を消費しやすい形態にまで加工する。そこまでが人間の労働の全過程である。つまり，人間がコメを生産し，消費する場合，収穫にいたるまでの農作業だけでなく，それを調理し食べやすい形にするところまでが，人間の労働の全過程なのである。つまり，本来，人間の労働はいわゆる家事労働をも含む全過程なのである。

人間は，前述したように男女の性的な差異にもとづいて，この労働の全過程を男女で分業する。これが自然発生的な男女の分業であり，家族ないし血縁の

紐帯の内部を構造的に組織化する基礎となるものである。『ドイツ・イデオロギー』は，このことについて，「もともとは性の場面における分業にすぎなかった分業が発展して，やがて自然的素質（たとえば体力），諸要求，諸偶然事等々によって，ひとりでに，いいかえれば《自然成長的》にできあがる分業となる」[2] と述べている。

しかし，この分業が直ちに男女の不平等の原因となるわけではない。原始的な共同体では，女の仕事も公的な仕事として認知され，男女は社会の構成員として平等に扱われる。しかし，私的所有の発生にともなって，男による女の支配が現れる。それによって，男女の分業は，男の支配を正当化し強める方向で変容される。

『起源』によれば，最初の男女の自然発生的分業においては男が食料を調達し，そのための労働手段を調達し，それらを保有しているのであるが，私的所有の発展とそのもとでの富の増大にともなって，それを父系にもとづいて相続しようとする衝動が現われる。その結果，それまでの母系制がくつがえされる。そこに男による女の支配が現われる。家父長制の出現である。

> 「幾組もの夫婦とその子どもたちをふくんでいた昔の共産主義的世帯では，妻たちにまかされた家政の処理は，夫たちが食料を調達するのとまったく同じように，一つの公的な，社会的に必要な産業であった。家父長制家族が現われるとともに，またそれにもまして一夫一婦制の個別家族が現われるとともに，この事情はかわった。家政の処理は，その公的な性格を失った。それはもはや社会とはなんのかかわりあいもないものになった。それは一つの私的奉仕になった。妻は社会的生産への参加から追いのけられて女中頭となった。」[3]

今日の知見からすれば，エンゲルスによる男女の自然発生的分業の認識は素朴であり，現実にはその分業のあり方はもっと複雑であろう。また，家父長制の支配のもとで，家政の処理が家族の私事とされ，それが主に女におしつけられることは事実であるが，それはとくに被支配階級では女を生産的労働から排除することを意味しない。むしろ，女は男の支配のもとで生産的労働と家事労働との両方に従事させられる。マルクスは，「フリエは，一夫一婦婚と土地の私有とを文明時代の特徴としている。近代家族は，*servitus*（奴隷制）だけでなく，農奴制をも萌芽として含んでいる。というのは，それは，はじめから農

耕のための労役に関係しているからである」と述べている[4]。

しかし，基本的に男女の自然発生的分業が家族内部の社会関係の基礎をなしており，それがはじめは男女平等のもとに成立し，私的所有と家父長制の成立によって男による女の支配の関係が生まれた，という『起源』の基本的主張は，今日でも有効である。男女の自然発生的分業と，それが階級社会の家族のなかでこうむる変容とは，物質的生産の社会関係を担う家族の本質的な一側面なのである。

2　階級と家族

『起源』は，母権制の転覆は女の世界史的敗北であったとして，「女は，おとしめられ，隷属させられ，男の情欲の奴隷，たんなる子供を生む道具となった。女のこのような屈辱的な地位は，とくに英雄時代のギリシア人，それにもまして古典時代のギリシア人のあいだであからさまに現われている」[5]と述べている。

こうした自然発生的分業の変容による男女の不平等のもっとも先鋭な形態は，古典時代のギリシア人のような共同体的な関係から個別家族が自立した支配階級に現われる。支配階級の個別家族は，物質的生産の社会関係を担うという面では，私的所有を再生産すること，すなわち男の子どもを生み育てることだけを主な機能としているからである。そこでは，女は「子どもを生む」道具でしかない。

これに対して，被支配階級の家族では，女は大切な労働の担い手であり，男による支配が貫徹しているにしても，その支配の形態はよりゆるやかであろう。被支配階級の家族自体としては，その社会の支配的な労働の様式において肉体的な性差を基礎として男が主導的な役割を果たすかぎりで，男の支配が社会的な基礎をもっているにすぎない。資本主義的生産様式においてのように，肉体的な性差が問題にされず，女が男と同等な労働力として生産の場に引き出される機会が広がれば広がるほど，男女の分業が男の支配にもとづく基礎を失う。

このように，階級に分化した社会においては，支配階級と被支配階級によっ

て，物質的な生産へのかかわり方が異なっている。したがってそれぞれの家族の物質的な生産へのかかわり方も異なるのであり，それが物質的生産の社会関係を担う家族のあり方に影響を及ぼすのである。

3　私的所有の諸形態と家族

私的所有にもとづく階級社会は，さまざまな形態をとる。『経済学批判』の序言でマルクスは，「大づかみにいって，アジア的，古代的，封建的および近代ブルジョア的生産様式が経済的社会構成のあいつぐ諸時期として表示されうる」と述べている[6]。ここでのアジア的生産様式の概念が含んでいた原始的共同体の要素を捨象して，それを階級社会の初めての存在形態と理解すれば[7]，階級社会はおおまかにいえば，これら四つの生産様式を支配的なモメントとする四つの社会形態をとると理解される。これら四つの生産様式における被支配階級の家族のあり方を考えてみよう。

アジア的生産様式は，「共同体首長に対する共同体的献上が統一王国による貢納・賦役の強制へと変質することを通じて」成立する[8]。そこでは，被支配階級の家族はまだ生産の単位として共同体から自立していない。共同体成員の私的な占有は，「せいぜい園宅地」にかぎられる[9]。そういう社会では，一般の共同体成員（被支配階級）においては，男の支配にもとづく一夫一婦婚を基礎とした生産の単位としての家族は確立しえない。物質的生産の関係だけからみれば，とくに被支配階級の家族は，依然として原始的な共同体的関係をひきずっており，婚姻は対偶婚段階に，家父長制も未成熟な段階にとどまる。男の支配にもとづく個別的な家族は，はじめは共同体をまるごと搾取する首長階級での家父長制家族としてのみ成立する。

古典古代に典型的に発展した生産様式である奴隷制においては，基本的に奴隷は家族単位でなく，個人単位（といっても奴隷には人格は認められないのであるが）で搾取される。奴隷が家族を形成し，それ自身で再生産するかどうかということは，二次的なことであり，それが許されない場合も多い。個々の奴隷主の家族が基本的な生産の単位であり，そこに奴隷が組み込まれているアテ

ネの家内奴隷制においても，富裕な市民層が奴隷による大規模な農場経営をおこなうローマのラティフンディウムにおける労働奴隷制においても，そうである。奴隷制は，そのものとしては，被支配階級に人間そのものの生産の社会関係である家族形成を認めない生産様式なのである[10]。

封建的生産様式は，農奴制である。農奴制は，農奴を土地に縛りつけ，人身的に支配し，そのことによって剰余労働を夫役や貢納（現物ないし貨幣）の形態で搾取する。こうした支配の形態は，農奴が独立した生産手段の占有者であることから生じる。「直接労働者がまだ彼自身の生活手段の生産に必要な生産手段や労働条件の「占有者」であるという形態では，どの形態でも所有関係は同時に直接的支配・隷属関係として現われざるをえず，したがって直接生産者は不自由人として現われざるをえない」のである[11]。さらに農奴制は，「小農民が互いに多かれ少なかれ自然発生的な生産共同体を形成している」アジア的生産様式[12]とも区別される。すなわち，そこでは家族が生産の単位として自立しないアジア的生産様式とはちがって，農奴家族による私的な占有が確立するのである。たしかに封建的生産様式でも，家族が完全に経済的に自立することはできず，地縁にもとづく一定の共同体的占有が入会地の占有のような形態で残り，家族は地縁共同体に結びつけられている。しかし，基本的な生産手段は私的に占有することが可能になっているのである[13]。こうした家族の生産単位としての自立にともなって，被支配階級である農奴においても，物質的生産の社会関係の面から一夫一婦婚と家父長制がその家族を秩序づけるものとして確立する。

なお，農奴制から封建的土地所有を取り去り，農業という生産分野の特殊性を取り去ってみれば，あるいはアテネの家内奴隷制から奴隷を取り去ってみれば，さらにまたアジア的生産様式から共同体的な紐帯を取り去ってみれば，そこに現われるのは家族単位で個々に独立した小商品生産者である。このような小商品生産様式では（歴史上，それが支配的なものとして現われることは例外的であるが），家族が私的所有の主体となる。労働において肉体的な性差を基礎とした男の主導性があるかぎりで，この生産様式においても一夫一婦婚と家父長制がその家族を秩序づける。

最後に資本主義的生産様式は，労働力の商品化を基礎として成立する。労働力の商品化は，第一に労働者が人格的に自由であること，第二に労働者がすべての生産手段から切り離されていることを条件としている[14]。資本は，家族単位ではなく個人単位で，労働者を支配－従属の関係に取り込む。この点では奴隷制と同様であるが，資本主義的生産様式における労働者は，人格的な自由を許されているのであり，その人格的自由にもとづいて自らの家族を形成するという点で奴隷と異なる。労働者は，その人格的自由にもとづいて家族を形成することを私事として許される。しかしその家族は，もはや直接に物質的生産の社会関係ではありえない。それは，人間そのものの生産の単位としてのみ，物質的生産との関連でいえば，その人的要素である労働力を再生産する関係としてのみ，存在する。労働者家族が人間そのものの生産の関係として存在するかぎりで，「資本はこの［労働者階級の不断の維持と再生産という――引用者］条件の充足を安んじて労働者の自己維持本能と生殖本能とに任せておくことができる」[15]のである。

以上の概括から明らかなように，これらの四つの異なる階級的生産様式は，異なる形態で被支配階級の家族を私的所有にもとづく支配－従属関係に組み込む（小商品生産様式は，そのものとしては階級的生産様式ではなく，また，それが支配的な生産様式になることは例外的である）。具体的な歴史的な社会においては，これらの生産様式のいずれかが支配的な生産様式となりつつも，他の生産様式を副次的な要素として含むことがある。そこでの具体的な家族のあり方は，支配的な生産様式によって基本的には規定されながら，副次的な生産様式によっても影響される。

4　血縁紐帯・地縁紐帯・商品関係

『ドイツ・イデオロギー』は，社会的分業を私的所有と階級分化の基礎として論じている[16]。家族をこの社会的分業との関連でみると，家族は社会的分業の諸分肢の構成単位であり，この諸分肢間における労働の配分と生産物の分

配・交換を媒介する諸関係が家族のあり方に影響を及ぼす。

私的所有がもっとも発展した資本主義的生産様式においては，社会的分業は基本的には階級関係と商品関係によって媒介される。そこでは，ばらばらに分立した家族が，階級関係と商品関係を媒介にして結びあわされる。階級関係においては，社会的分業は「物質的労働と精神的労働との分割」(17) として現われ，前者を担う労働者階級が後者を担うとされる資本家階級に搾取される。資本家階級の家族は，労働者の搾取のうえにみずからの人間そのものの生産の関係を展開する。逆に労働者階級の家族は，資本家に搾取されているという関係のもとで自らの人間そのものの生産の関係を展開する。他方，商品関係が支配的となる資本主義的生産様式においては，家族はすべて個々ばらばらな家族として，人的な相互依存関係としての共同体的関係から切り離されている。資本家階級の家族も，労働者階級の家族も，商品交換をつうじて人間そのものの生産に必要な生産物や労働を手に入れる。しかし前資本主義的生産様式では，階級関係と商品関係によってのみ，社会的分業が媒介されるわけではない。

階級関係による分業の媒介は，階級分化のうえに成立するすべての生産に共通した側面である。もちろん，階級支配の形態が異なれば具体的なあり方は異なるが，階級関係にもとづく社会的分業は「物質的労働と精神的労働との分割」であるというのが基本的な側面である。そして支配階級の家族は，被支配階級の搾取のうえで自らの人間そのものの生産の社会関係を展開し，被支配階級の家族は支配階級に搾取されるという関係のもとで自らの人間そのものの生産の関係を展開する。

ところが，商品関係が基本的な物質的労働の社会的分業を全面的に媒介するのは，資本主義的生産様式においてのみである。商品生産は，社会的分業が個々ばらばらに私的に生産する生産者に担われる社会でのみ支配的な生産様式となる。「およそ使用対象が商品になるのは，それらが互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにほかならない」(18)。直接的な人間相互の依存関係としての共同体的関係が破壊されたところで，はじめて商品生産は支配的になるのである。

前資本主義的生産様式は，なんらかの共同体的関係を基礎としている。した

がって前資本主義的生産様式では，商品関係が全面的に物質的生産の社会的分業を媒介することはできない。物質的生産の社会的分業は，商品関係以外に血縁紐帯や地縁紐帯によっても媒介されるのである。氏族においては，血縁紐帯が基本的に物質的生産の分業を組織する。完成された農奴制下の村落共同体では，地縁の紐帯が基本的にそれを媒介する。

社会的分業を媒介するものがなにかという見地で，階級関係を捨象してみれば，社会の歴史は，血縁の紐帯が地縁紐帯や商品関係に置き換えられる歴史である。この社会的分業を媒介する関係の違いは，血縁紐帯にもとづく氏族から分立する個別家族の生産単位としての独立性に照応している。氏族共同体において血縁紐帯を基礎とする分業が基本的になるのは，個別家族が生産の単位としては独立していないからである。村落共同体としての地縁紐帯にもとづく分業が基本的になるのは，地縁によって相互に結びつけられることによって補完されなければならないとはいえ，個別家族が基本的に生産の単位として独立するからである。商品関係によって分業が媒介されるのは，個別家族が私的な生産者として血縁・地縁の共同体関係から基本的に独立するからなのである。たしかに資本主義的生産様式では，労働者階級の家族は物的な生産の単位ではないが，労働力商品の再生産の単位として共同体的関係から切り離され，独立して現われ，商品関係による社会的分業の媒介が支配的となるのである。

実際の階級に分化した社会の歴史では，これらの分業を媒介する関係は相互に補完しあいながら存在しており，そのあり方が具体的な家族内の男女の分業や男の支配のあり方に影響を及ぼす[19]。

［注］

（1）　ここで家父長制とは，『起源』でいう家父長制家族だけをいうのではなく，広く家族内における男による女の支配をいう。

（2）　『新版』61ページ，『全集』第3巻，27ページ。

（3）　『全集』第21巻，78ページ。

（4）　「モーガン『古代社会』摘要」『全集』補巻4，291～292ページ。

（5）　『全集』第21巻，62ページ。

（6）　『全集』第13巻，7 ページ。

（7）　太田秀通『奴隷と隷属農民』増補版，青木書店，1988年，98～115ページ，

参照。

(8)　同上，119ページ。

(9)　同上，121ページ。

(10)　同上，10～76ページ，参照。ここで太田は，奴隷を血縁的な共同体からも地縁的な共同体からも切り離された「共同体なき隷属的人間」として把握し，古典古代の奴隷制の諸形態を分析している。

(11)　『資本論』第3巻，『全集』第25巻第2分冊，1013ページ。

(12)　同上，1014ページ。

(13)　太田，前掲書，137～138ページ，参照。

(14)　『資本論』第1巻，『全集』第23巻第1分冊，219～221ページ。

(15)　同上書，『全集』第23巻第2分冊，745ページ。

(16)　『新版』32～38ページ，64～69ページ，『全集』第3巻，17～21ページ，28～31ページ。

(17)　『新版』60ページ，『全集』第3巻，27ページ。

(18)　『資本論』第1巻，『全集』第23巻第1分冊，98ページ。

(19)　鈴木国弘は，社会的分業を媒介する関係の見地から，日本の中世における家族を分析している。たとえば，関口裕子，鈴木国弘，大藤修，吉見周子，鎌田とし子『日本家族史』梓出版社，1989年，の第2篇「中世」を参照。

V　イデオロギー的社会関係としての家族

先にも述べたように，人間は意識的な動物であり，正しく反映しているかどうかは別にして，自らが取り結ぶ社会関係を意識に反映させ，それを意識的に再生産する。このように意識を媒介にした社会関係であるという面からみれば，家族もイデオロギー的社会関係である[1]。イデオロギー的社会関係としての家族を分析する場合，次のような点が重要である。

第一に，家族が自然的関係であり，同時に物質的生産の社会関係でもあるという点である。イデオロギー的関係も，この物質的生産に規定された二重性から生じる。

生殖・子育て・老いと死といった自然的な基礎にたいして，人間は物質的生産の社会関係に適合するように対応し，それをコントロールして，家族という社会関係をつくりあげる。その場合，その対応やコントロールはイデオロギーを媒介にしておこなわれる。また，物質的生産を担う社会関係として家族が存

続するには，男女の分業や階級関係や家族と共同体・社会との関係などが再生産されなければならない。これもまた，イデオロギーを媒介にしておこなわれる。こうした物質的生産に規定された二重性から，婚姻，性愛，出産，子育て，男女の役割，老いと死，葬制，相続，家族の統一性と連続性，家族の社会のなかでの役割・位置などについてのイデオロギーが生まれる。これらのイデオロギーを媒介にして，家族は形成されるのである。

第二に，こうした家族のイデオロギーは，けっして宙に浮いたものではないという点に留意しなければならない。

それらは，習慣や風俗や儀式や掟や法といった形態をとって，人間の家族構成員としての生活を具体的に規制する。それらは，日常的な生活のなかでくりかえし反復され，それによって再生産され発展する。そして家族の構成員が実際に行動するときの規範として意識される。この規範に則った行動をしているかぎりで，人間は家族の構成員として認められるのである。

たとえば，家父長制の支配する家族において，女が家事・育児をすべきだというイデオロギーは，女が家事・育児に日常的に繰り返し従事することによってのみ再生産される。それは，その世代だけで再生産されるのではなくて，その姿を子どもが見，その子どもにも幼い頃から男女の区別が与えられることによって，次世代にも再生産する。そうした日常習慣に逆らって，女が家事・育児を放棄すれば，家父長制のもとでの男女分業のイデオロギーは再生産しなくなる。したがってこのイデオロギーを守るために，その女は家族構成員として資格を奪われ，離縁されるのである。

家族のイデオロギーは，そうした家族の実践的意識である。そして家族は，そのイデオロギー的実践をつうじて家族構成員をイデオロギー的に再生産するのであり，その面からみれば，自分自身で自分自身を再生産するイデオロギー装置なのである。

第三に，階級社会におけるイデオロギー的社会関係としての家族は，イデオロギー的関係の内部でも従属的なものであるという点に留意しなければならない。

『起源』の物質的生産の発展にともなって，地縁集団と国家が支配的な社会

関係として現われる，という指摘を思い出してみよう。原始的な共同体においては，血縁の意識が社会関係をとりむすぶ基本的な意識であるが，階級社会において家族は，国家や地縁集団というイデオロギー的社会関係の構成要素として再編成されるのであった。私的所有を守るイデオロギー的社会関係としての国家が生まれ，その下部組織として地縁集団が組み込まれ，さらに，その地縁集団に家族が組み込まれる。「家族の制度が所有の制度によって支配され」るのである[(2)]。

たしかに家族のイデオロギーは，人間そのものの生産の社会関係である家族自身が物質的な生産において担う役割やそれにみあうように自然を制御する必要性から発生する。しかし，階級社会において，それは必ず国家による地縁集団を媒介にした支配の単位としての形態を付与されるのである。ただし，地縁紐帯による家族の規定は，地縁による共同体的関係が物質的な生産の社会関係において果たす役割の違いによって異なる。つまり，地縁関係がなお生産の本質的な契機をなしている場合には，国家は，家族を直接には掌握せずに地縁集団だけを掌握し，地縁集団に家族の掌握についての強い権限をもたせる。そうでない場合，国家は家族を直接に掌握し，地縁集団は単なる国家の支配の伝達機関でしかない。

いずれにせよ，イデオロギー的社会関係としての家族は，国家による支配の単位としての形態を与えられるのである。この面からみれば，イデオロギー的社会関係としての家族は，物質的生産の実際に規定された存在であると同時に，支配の単位として国家によって承認された存在であるという二重性をもつ。これら二つ側面は，次に述べるようなイデオロギーのもつ性質にもとづいて，ずれる傾向がある。

第四に，イデオロギー的社会関係としての家族は，それが物質的な生産においてになう社会関係を基礎として発展するものであるが，ときにその実態とずれるという点に留意しなければならない。

イデオロギーは一般に，基本的には物質的な生産の社会関係によって基礎づけられていながら，他方で「ひとたび存在するようになると，あたえられた観念材料と結びついて，この観念材料をいっそう発展させ」，「独立に発展しただ

自分自身の法則だけにしたがう自立的な存在」となる[3]という側面をももつ。イデオロギーとしての家族も，当然こうした側面をもっている。

『起源』は，モーガンが発見したイロクォイ族の親族呼称と実際の家族とのずれについて，「家族が生きつづけているあいだに，親族体系は化石化する。そして，後者が慣習として存続しているあいだに，家族は成長してこの体系からはみだす」と述べている[4]。これは，イデオロギー的社会関係としての家族と物質的生産に規定された人間そのものの生産の社会関係としての家族の実態とのずれを指摘しているのである。ここでいう親族体系がイデオロギー的社会関係としての家族のことであり，成長する家族が物質的生産に規定された人間そのものの生産の社会関係の実態のことである。

このようなずれは，国家が家族を支配の単位として自らのうちに組み込み，その支配方式を固定化しようとするとき，大きくなる。たとえば，日本の近世初期における「家」は，物質的生産の単位としての家族や人間そのものの生産の単位としての家族の実態とは異なっていたという。つまり，物的生産と人間そのものの生産の単位としての家族は，男子の均分相続によって小家族に分裂していくのが通例であった。ところが，国家の支配の単位，あるいはその支配の下部組織である村落共同体の構成単位としての掌握は，その分裂の実態に追いつかず，分裂前の家族をもとに「家」として把握された。実態的には複数の個別家族からなるが一つの個別家族によって代表される「家」が成立し，「家」を代表する個別家族以外は実態的には自立した家族であっても「家」を代表する個別家族に従属したものとして把握された。そしてこの「家」が，貢納や夫役を負担し，村落共同体の運営に参加する単位となったというのである[5]。

このような例は，普遍的にみられる。第二次世界大戦前の日本では，家制度によって家父長制的家族が社会の基礎であるとされた。しかし，それは資本主義的生産の進展によって登場した労働者家族の実態とは大きくずれたものであった。今日の日本でも，国家の政策は一方で女を家事と育児に閉じ込めようとし，他方で女を賃金労働者として生産の場に引き出そうとしている。そうした政策は，今日の労働者階級の家族の実態とずれている。

[注]

(1)　イデオロギー一般の理解については，上野『アルチュセールとブーランツァス』第2章を参照。

(2)　『全集』第21巻，27～28ページ。

(3)　エンゲルス『ルートヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結』『全集』第21巻，308 ページ。

(4)　『全集』36ページ。

(5)　長谷川善計，竹内隆夫，藤井勝，野崎敏郎『日本社会の基層構造』法律文化社，1991年，参照。

おわりに

本稿は，マルクスとエンゲルスにとって家族分析の意義を明らかにし，家族の本質的な諸側面を概括することを課題としてきた。その課題は，以上の考察で一応は果たされたと考える。しかし，とくに家族の諸側面については，私自身の現在の力量と紙幅の関係から，まことにおおまかな概括に終わっている。それらは，家族の社会科学的な分析の方法として提示されているにすぎない。しかしまた，この提示にこそ私の課題意識があったのである。

いずれにせよ，家族の諸側面は，歴史的に具体的な存在である家族の分析によってより詳しく展開されなければならない。この点は，今後の課題としたい。